歌城歌集

春

一

特別
~4
7350
1

特
A4
7350
1

序

江府旗下世臣　小林先生壽過七十多咏和歌而樂之自號歌城養翠久貝君從先生受業今為大番頭在京欲為先生刊其集而傳之於後因人命其序於鄙ニ辭以不知和歌則君曰先生平生不

45 1150 (1)

好世所謂歌人者所以託子也先生之說曰和歌發於人情固無朝野之別然今為公卿縉紳家之業至於武士則不可專好之也武士而好和歌則軟柔移性士氣萎茶不成國家緩急之用焉吾之咏和歌猶人之圍碁點茶或玩盆樹籠鳥聊以遣興耳未嘗以此忘於勇士喪元志士在溝壑之本職也世之歌人輙謂我邦之道在和歌然和歌則家不齊國不治其妙可動天地感鬼神矣而顧其為人則皆怯弱如婦女退懦逡巡臨難苟免安能事君能致其身哉故今之歌人

無可與語者矣先生之言如此子
幸題數語則先生必喜也獨閒而
驚先生之老而益壯且欽其說有
裨於士人因以爲翁之好和歌出於
遊戲之餘未始妨其武道蓋如曹
操之善草書劉玄德之好結毦
耳嗚呼先生其六〻山人之流亞
乎元和大坂之役山人獨出營跳
盪斬首二級以犯軍令黙隱居
京北詩歌自娛而終身不渡渡鳧
水與公卿縉紳交游其氣節風
采人皆景慕焉今承平百餘年
四竟無壘先生雖無事跡可見
而氣象之相肖似也可想矣故獨不

以不知和歌国辞而作之序

嘉永二年九月〔?〕衡撰并書

立朝たちひ
春霞の立わたる〔?〕
ことゝと
ゆくての春のみのうきへ
きやまくはなくさみならぬ
のなく
あ〔?〕己年
う〔?〕

庭中に造れるゆきの山をぬく ちるやまれ 胡目子乃のけ

早稲田大学図書

歌城歌集

春

春たちける日

ふるとしをゆく年は惜しも嬉しきに花のまちへけふねきぬり

春立る日ゆくとしをよめる

さゝ竹のよやこれからにたる春のたちそこしとわちおられて

五十に余りぬるとしの春

ゆふしへの春をしおもへははるゆかぬわか身のまもりうひもなし

海野松翁の家にて立春

以不知和歌固辭而作之序

嘉永二年己酉暢月

浪華　畏堂筱崎彌撰并書

京都帝国大学図書

歌城歌集

春

きしもちける日

ことしとなく年はゆきしも晴しきふ花のちるとへけのちきふ

春立くる日ゆくあとなりて

さく竹の見やこはちらかたる高たれてこしをちらおられて

五十ふ年ゆくとしのきさ

ゆふ〳〵の春をおもへけるかくぬ和ゐ多のきしをつうひもぶ

海野於義の家にて立春

雪もはるかぜのせきこるらん　ゆきまをまちれぬうもし

立春山

まねのちかきかをむをはれたをあの松をたつま山ふきをこらしも

山家立春

うぐひすのきこもる谷の近くなりたるきるのこそ春のおとはきこゆ

小山田與清ノ家ニ於テ都立春

さらぬふ於の雪もときをはるさへ人をまちかねるかな

村田素行ノ家ニ於テ春従東到ト題スル

いつまゝ雪をかくこゝろとふいつるもちをくふ於ふまのきつゝ井

春情處〻多

まつ於きを谷のちかのもうけたるぬ今ハいつこと花咲りのたゝ

初春河

氷ゆ川はるの風おくせらるとちかのもおとふかくるこゝろ

山家春水

人とこそ雪もさこのゝの山かゞもまみかうれんかをみこゝ於引

若水

瓶のくちふはつわう水をくみ雪を柳やきもむ於ふ引ふをゆ

春江波多

春江の波多雪この江戸ふあるをくるこゝろ於のをし

[illegible]

初春はけふの初春をつねきしの代々は例ふんをひてそきる

[illegible]

万代のをうはうはうはみをあけてことあれかをすはるふのとうつき

むつきのたゝ[illegible]　すみゝにのあらす

隅田川きしのうすらひうちとけて花のたゝ[illegible]は春こゝろ[illegible]

氷始解

うはは氷をかけふをうりうはうはうはうかをむ波のたつはは

横田徐翁うあはうふ　氷解とうふことを

[illegible]

海野遊翁うあ　春風為氷

春風ふこうをかくらし[illegible]の川水こうて月のはやくうるた

はるかすふををををををふあぬ〳〵汲ふやをき山のあはうら

緑竹矢春

与かくとふ色の常なるれ竹い行はゆ〳〵ふうをををるらむ

うつつこゝちはみ四れのうるれく色あゝををるるるの其竹

春生人意中

はるこゝをこゝるそるナはたちをく世をふ山へふをうひうれり

子日ふ嵐山の松ひろむとてゆきくるふ山ゐる乃

松にうゑけれを

わかの浦あそつみうてゝ名もあゝきをふ松引とそ人のいふらむ

子日松

もくちとうさゝ人つる壁をのひろふ松ふるせゝといとひとをひく

子日松與

おもしろき壁のちまの形ゝや侍人のまつひきあく他の与をひも

山家子日

人形みふる日の小まつ山ゆゝとゝ好不世のそふひろれてそをむく

初春ちとつねのふ雪袖うけてきみる代ませと引てくるう松

正月七日ゐ日すゐ家といふをを侍ゐ演侍ゐ

よませ〳〵

ゐ世といたゐほ〳〵ふ松を人毎ゐちのそとゝと えゝひとを引

山家

わのくとたてる本たちの未きえてかすミかゝらふくゐ山本

春山松嶺

松の雪きえぬみ山のつきかけをみやこのまゐ、つゝゝひけむ

遥峯帯暁雲　嘉

すみそめのゆふへのそらはひとえにかすみのこめる

　　同　嘉

うちなびくまちはうすくの柳さえさはしはせてみたつかすみ哉

　　海上　嘉

雲なから結かすみわたるまの海よ杜の本紫の陰ふかくそ

すみのえはまの曙きてそれとは嘉なれひきたつこすはす

　　小林長文　叙

波ナのうらやはやき衣はるとつとまこはとそるも立嘉うれ

革島蓮阿　叙

のとうはるはやのはうらのけさはそ波もうはみのはぬさとそ

　　江上　嘉

はるはとはやはつまのつあてはもきはにあへもあるくもつ嘉うれ

　　嘉　中洲

布引のゆれのはるはらはやあ春日へてたとうとあくもつかすみうれ

岩たるはのもとあくうとうえてはわはゆくるうす嘉こうな

　　本間游清　叙

行のあとはすきくはのこかすむ雪は霞隔遠樹とふとをを

水辺霞

夕日さすたかふの川の色みれは霞つき末ハこのもとに流れひかりかな

寺山要室家室　原上霞

かすみ思ふ春ハかきりも見田かし打出ゆけともむさしの原

名所霞

むさしのもまきゐる春のまつり狭山の嶺そけさハかすめる

新続家集春の家にて水御春宮を

みよし野川氷なきの流せるともかすみこそかけりける

春日皇山

ある山やくもるかすみのまよりうつ世に見えぬ花の色かな

鶯

うくひすの声ハあやなく織出せ柳のいとハかけそちるなる

うめの花咲にあるをやとりて鶯さへに来てハ鳴なる

谷の戸にすく鶯の声をきこの山里ひとのまつさらこそなる

おしなへてうめさくころも鶯の鳴ことさらね耳の花なれ

うくひすのうき神姿を家にてきさハ柳かしけるかひもなし

鶯もうかふ柳のいとまかみ花のかけともかくれてや鳴

待鶯

うくひすは巣よりかへるへく棲し竹ゆかしかくれや鳴よるの声

村田春郷が家にて山家待鶯

花とのみ雲はこそやそのかく鳴て来とさくやよ谷のうくひす

山家鶯

うくひすのあさきくとえも山里にとなるにてもちはすまし

鶯告春

世に春に来にけらしなかきこもる竹のおくにも鶯の声

鶯出谷

谷かけの雪より出て春山のかすみにうつるうくひすの声

谷鶯

たに陰の雪にかけたや鶯の声おもしろくうちならむ

海野松之が家にて鶯有慶声といふことを

よよしかくえて志らる神わさと染とむとよく鶯のこゑ

石原正明が家の会に夕鶯を

今日しも帰るたるに鶯の夕くれに使うれしきうくひすの声

竹裏鶯

末かけむ里の中にもうれしも竹あるかにうくひすの声

ゆくやなけあそこのうくや姫竹の中なる里のうくひす

うらぶれたる竹ふの時雨を嬉しがる花ハ義理なしなるもあり

まさかれやうもなく竹むら消のゆきへあるを嘗のわく

海邊於嘗うらの家のたゝみ山永嘗

嘗の時雨ふるすゑの山里を手折かゝるまさふ枯くらし

しめみうやうわけや嘗山とかゝハ耳をつゝしる人を思わくよ

雪中嘗

うゝひとの花さけ〳〵と時をるふわりあの雪やゝしてふき

野嘗

一夜ねゝくきつゝやうけふも紫のすこしも時みの嘗ふ出ちる

井上文雄うらの家のたゝふ嘗呼ぶ

人ゝを花ふ似ゝ枯きうゝ時てかゝゝやうけふ

嘗琴和琴といふ題を秀歌ふ

つゝ琴のをこやふかゝふ嘗のちゝいてゝもいもかゝしてをあり

あゝかゝしたゝをゝうゝひきをちとわゝハわの膝の〳〵ふきてをわゝるむ

正月七日人ふ若菜やるとて

むさゝ世をきゝ春のひふもえぬもやゝと雪ふ搗るゝあて

又ふ菜

世をゝふ人ゝもゝくるゝまもまわわやゝふ搗ふのつまかゝけゝて

いさけふは若菜つみにとまかりしはれん大宮人のそてもかへつつ
名もかくてふり出つとみえてまたふるやましきは若菜にあつり
まつに寄る野辺の春こそ嬉しけれ若菜も行と先つまむとて

雪中若菜

かきてとりわの志めし野の和かなに雪のつむとそうそふくけれ
むらきえの野へにふるあとをあらしら若菜摘とて雪やふみけむ

屏風に女とも野に出て若菜つむところ

いひしらぬ外山はけかすみの若くさのつま吹こつま野辺のまつの葉

若草

野辺の色もかへてこころにまかせけれ行のさるやまさわかねも

踏歌

春の夜の月かけ川にふむ足の音もさやかにきこゆらむ

残雪

立かへりけさは庭のおとかけに踏るも惜し庭の志ろゆき

久貝因幡守正典ぬしの家にて春雪を

月ならぬ春の夜に出し程のことよと雪そふりける
降きてそ新端もいまは雪つみてちるとやいそむ春の山さと

村田春海の家にて春雪似花といふ心を

おとかけを花ふかしをそてまとと時を山さんこ戸ふ法者のふる

正月のはしめんふ氷花を見て

あまこ〳〵ちまとと山風のかやさえをまくみ氷のちれそ咲ける

鶯宴

うぐんと咲柳とあをむをこんれもまふなともかせの宴くく

山本正月ふ部ふて鶯宴風とつふさとを

かをぐんともまこ初まの東ふとうぐんこくさむく鶯せてふく

二月鶯宴

きさこ〳〵ちやふとをさるを志のぐんふまるこ法者分の山

梅

はるのふてまつこく梅の花ふれもうくちをぬハ行こまうけま

梅い今や花たらてふ四ふるを枝ふうつみそ花のちこいき

栽梅

移〳〵こふて宮きこうむ人まこむ新宿のこふよ年のたふさけ

清ふ流ふ家はちふ霧暖梅用こいふとを

宮るのかこくけ氷やくふけこうぐんさんまとふかをる鶯つを

梅盛得ふ

くふ人ふかちる清〳〵とんきのふこうこひ〳〵とようぐんのかくれ

温故集の梅花曉雪といふ事を

うつもれこもる雪のかもみ法こうゝ〜梅のふりひそこさ情うゝる

山家梅

雪もきえ霞をたゝぬ山さとも春よゝゝ〜うめけさかさく

村田春海の家にて梅を衣香といふ題

うゝとるゝ袖ふきかへすゝ春風のうめ〜雪ふ匂ひ法く

雪中梅

雪の枝うつもれ法ゝ梅はゝう雪の見ゆるうめのさゝ花

夜梅

うゝ村の梅花見に庵ふかうふ松ふさゝうふ法ゝる法ゝ紅すれ

本村定良ゝ梅花映月といふ事を

月夜ふと本ふとふ法ゝ梅の花ゝ法ゝ法ゝ月ふ法ゝ

月夜梅

おもゝろ花のふ法つのかさを匂ひふて月ふ法ゝ法ゝふゝ法ゝ法ゝ

ゝ法ゝの花ゝる月かけふかゝゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ

水邊梅

かゝみふつゝ法ゝふゝ澤の水ゝ法ゝ花の影ふ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ

名ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ

梅花深み

四くさのようつろふめのかけはしをとふ花をちりける
池のうちに花のうつくしきをおもひてや梅ふ雪はわく

赤村定良の家の前ふ水辺梅花を

おく川ふうつるを見ては梅花とおもへぬみもねたけれはこそ

同し家の隣ふ隣家梅を

とひくふ風のあしもを梅ゝの垣ゝとそ家ふあれはは

なか梅

宮人の花とをきめる時をは梅ゝをいとはれてこそ

久松祐之の家ふ墨梅

花ふまてはは雪ふ見かとしあやまつの墨はとはこそ

野外梅

みな人の袖ふうつりてかくをかも花とせめ野外の梅ゝ

岡梅

きまのしはをのをとこのをそきふ伊ゝ梅のとろ花

本間游清の家ふ紅白梅

紅ふうつるふ白とはるめふ梅とあとはるを紅と

落梅深み

小のうつふまれくとちるうらんの花新うまれとぶみ川へを

伊尾秀新うもあめとふ柳紙

ふいうらはるとしるみ新まゆ柳のいとさまくふ寿くらむ

梅花かをふ〳〵ぬちく学みゆ柳のいかうをわもてかさまし

海野牡丹うもあふて柳新まをといふるふ紙

まう柳のふみみうをそめとそくるを紙後うを〳〵

柳陰風

梅うのをうちくかをる宮をいく柳を見れとまは風のふく

仲田新忠うあふて垂柳福池とふとを

たるのひふきーのやれたけのあれやあわく池のめるみゆくらむ

あはけうふ〳〵ふつて柳を

かのくとうくるうやの赤見て柳ふうるうはかをみうあ

小魚 柳

すこ田川てみのさうう花いをけやなきを見れはあえそめふうう

あのうふゆ〳〵ひと

咲花を見れうくを結人のあふく似るを川わひうあ

をすうひふをうや春世のちうひはとふすうういまもえぬと

たあのをとかをとそ〳〵と後焼〳〵人うを藤はとく出ふうれ

春月

うつりゆく新たなれやうゑ梅の花にしも月さしそ
へ見てかすみゆくみのつまゆゑとはしらぬ春の月
山のたつふうゐむ雲もさひしきに花ちるかげのはるのみち月

嘉中月

かすみこそうしろめたけれ春の月空ゆく雁はもゆくへを
野春月

わひ人のあるいなたふ雲もとまれ春のみちひさ
うすかすみ光ちらせ交る松の月みとしろむ世つゝの松

かすこゝのみちうゑものの夕月とさゝるきゝ梅と花とさゝるゝうゝふ

海邊春月

うゝむ夜ち月と雲の小ゐ時三の小浦のゐとおかろめて

ゐゐ春月

ゐのおもふうゝふ月ち大空ゆゝうゝむちりハかすまあさちちけつと

行春月

やゝりきぬ行衛のゝゐのゝゐ結ゝる春のゝゐ月

春月 幽

めぐる松の月ひゝるのゝす星夢ものふゝかゝもひゝゝふ

旅宿春月

ちる花をおしきるまでに一夜寒む月もやとるらさみ枕ふ

春曙

おもろおの月もとらしみ移ってあぬ曙の雲くまなひろうお

月もいろ雲をさまるうき匂ひ花ふ結とる山けやの〜

おもかけのしるの帰るさふかそもひらん自ふしむ月のとをみ曙

かるうを紅ふけも出るとつ〜こ〜に花ちる山のあけやのそら

うめつ雪の分ふしむ月紙名残をなくかる宿の明及

久貝因幡守正典主の家に春ふ月ふ題を

落日雲かけもかすみふつまれて花とつつ移るけやのやま

山春曙

を風かすこうとうけよ梅花まと雲かきのけやの〜山

浦春曙

おの〜ぶて浦のまつ系ふてあて波ふのとろてかそむ浪式

名所春曙

ちみの江やかうこ社奥ふ海ふて陽とやき 清瀬しまふ山

閑中春朔

雪のちふふ枕のゆんさめこの月れと新年ふ新日さ波ふ

春雨

入相の淺ひきもとおとつれる雨靜かなる海の松ふる
つゆ〳〵ふる春雨ちさく〳〵花ちりてのこるかつらまし〳〵
花四月ふる雨いとたゝく春雨も柳ふるゝ時しかの〳〵
ふるひ雪の消るもさびしたちぬふるめふるちるのゝ夕ちれのゝち

海邊春雨

波のうつゆめるたゝ雨よわゝつみの海松さへぬれとやゝ

野春雨

もえいてむ草のゝめぬれ揺ふるれちぬ野邊のたち雨

雨中春雨

朔東風のゝゝ戸吹いる情をむとおき出てゝれいたち雨のふる
きさらきのたゝ雨ふるいてゝいぬ雨ふりの形
ゝる雨ねさめして
つゝゝとわうゝゝしてたちの松は昔の美ぬ人すゝ社こうの
人〳〵墓の雨ふいてゝ行ふ雨
野邊ふまゝゝさゝゝひさゝつまをとおもしろ世人ふもあるか
村田春海ゝ歌ふ初年いはのまうて男女多く
りかふゝゝふ事ゝ

梅花山はさふあゆこも梅梅こそ春の夜みそらく　みしこゑ

やうこうの夫

梅を引き若葉をつこそ　かうしまふ花の日うをもを分ふうう

二月

枝ふるふさけや梅の花ときつまきそこ死もま芽きれむ

まそとかふこそを

時をを春ふやちひのちちをろこれうこ年のかうらまこうこ

帰雁

今もかをつるう雁の春ますり出うちきれきまの田ふへふ

春雨のふる夜さしこきを梅ふ雁こう雁のおこつきをり

今もとそをつ雁うれかきこそれかりる田ふこのみこのさと

天野政徳の邸にて雨中帰雁

玉つきもかふもを見を雁ふる春ふもしふうこを

かのくと時ふふこ雁ふまふはをもまそふ高くふん

夜帰雁

ふふふふこをこハまを雁はふとれハ月をこそもむ

山帰雁

春雨のぬるをれこふ雁れをれもりうあけのの山

関路帰雁

鶴鳴き花咲わたりて又とかるゝ雁ぞ帰る川の霞

村田春海ゝ家にて都帰雁を

かへるべき花の月にも大路は新ふけて北をのぞむ雁こゑ

帰雁遥

雲ぢのはるかに空のかけてもこゑ

野春鶯

春のゆきかきみの中ふるゆきになほとの鶯をかけそとゝまし

雪雀

多しとるかきへつるかくの空見れば雪はかりにあらねとわたる

雪もしろのきやをあはの空雀やつもるゝとなこうらん

雉子

夕日さす加と山ちをを鉄とときくはのつるをとふ雉子のちる

呼子鳥

花ちるゝ木ゝ梢をとゝ今もかなて呼こをとすれを呼るなく

鶯の聲

大海とやふるの聲をくれをくれるを鶯をかけて鳴ゝ

花

ちはやぶる山神の植ゑむ花の木はいく人の春ゆゑにかあらむ

ぬくほもぬるさむ風と世も山とやむしらてはるのゆくへ

たつたかはもみ〻なれたる花ゆゑやしあらん

かしはてに花さく頃ふかしひきの山はいかにも香ゆにほひつ

らしさらにもみゆる山ゆゑとはふかく我分に花ゆゑ任せ果てむ

ほゝてかさむとうのきわ〻に花ゆゑ物思ふ時とこゝろを

吹きあはせの行をゆくとて山もるらんとたゝへて人ゆをゝ〻ゆゑ

花さそふ山のかゝをを立田姫れゆをとゝとんしらゝすれ

濱松待乳の与まゆゝる梅のゑゆ

きをつくちゝぬさゝのの花ゆをとゝはるゝ人さゝを久しかゝらむ

梅

天地の中ゆをさゝふちかしをつゝふさゝあて神のゝゑけむ

ほゝふゝもゝるの梅ちゝぬゝ志あゝしとゝるかゝゝきの神

出とゑにさかぬさゝよ日なのもはゝも梅と尼ゆる家ゝゆ

とゝをゝ今ゆをゝて多ゆゑの本なるをわきて梅のゆゝゝきゆ

ゝゝひきの山ゆゝもゆをゝとさゝゝ今時ゆゝやひけるゝゆ

さゝゝゆゝるゝゝをゝ見ゆゝ梅花ちゝゝゝゝ見ゝゝやする

かゝゝゆゆさゝゝゆゝのみゝゝとゝゝ花さゝ考さゝゝをゆゝゝこゝゆ

えだこしらうぶの梅のもしどろもみけるうつまき花をうつま
ゑあつまるつまの日のうまゐわしゆ梅さらうかさしてゆくさもつま
かきうとしちくふさてしもうらみとうらてとて梅ゆそうる郭
さくらくさからくかまくふさきの花ゆゑゆ物とを見人

天野政徳の和みをゆ山梅を

ひしひきのまゆ山さらくほのくと嘉よみちつあさちくけうれ
花の数ちみくる中ゆ
出かなくゆ今をゆまきまの面よ花まつたくふ行うくくき

行花

おもうみをこうゆかけあてかるゆ花まつけのこねのこうくと

雨中待花

出のころけ美の面れの海をゆうふ花けをのこまつけとまけく
いけしかとまきくく花のとまれるみひくゆくくも見ゆ面うれ
花海さゆのふるゆ海うきて花まくん枝ふこゆるこへくさく

華嶋 蓮 阿ゥ彩ふて 雨中待花 ゆふ

出かくゆ

さく花のまくくとれゆ世中ちそけてきと見ゆわゥ方ゆ

満花

春さうしくもつゝを見むとつゞ山うちはわたるを中宿ふゝして
くもつねたゝ山路の雪は近まさるゆきとも見しらぬうゝ櫻を
こはたゝろハ行雪も花のさかりはうくもゆ足のむくかゝへりてむ

葉　花

はるさうは四方の山をを見わたせばみわ白雪のかゝるなるか
花さかりふる雪を見やあてとらふるを
山もとみちゝみうすもとえつゝふこゝ雪の花のふもひわたるめ
あはくるあしゝゆをの花をうえて
わたのんゝさともちゝみぬさらゝ花ゆゑ見はあもちゝうゝみゝ

あ載ふ行の中ふ櫻のちれさ花くゆゝをえてと
つゝ年を
見しゝゆけのゝ色ふもあえゝ春ふいこそ櫻の咲まゝうゝむ
秋中見雪
まゝ夜のゝ行ゝ月ゝうゝ秋ゝゝ雪海の上世ゆ花をえゝゝ外
歌　花
をゝる雪をゝゝ春ゝて風ふ海をむも行たゝゝや櫻いゝゝまゝ
別　花
中ゝふ春ゝをゝゝ春ゝ月ゝ行ゝ花よいゝ世の世ゝ似ゝゝゝ

遠ふ樹の花をうてゆくあ
ちこちさかりもゆるやう〜や樹花神かけてを恨のこうし

花未絶

かのゆさ〜かく〜ふをうてもなほ日ふるれもこれとあるぬ花のかな

朝花

けの見四る空もさんこの朝つく日ふかへふ山のをけこそかる
志の夫は高ふてこそ花の良をふ見て〜こやをこけくふをぬ

海雲拾遺の歌ふて花前花

さら〜花まく吹こうの力ふもおなをあをあをを弘見ふこうれ

花さんとかふ〜ふ〜ちをしいつのをふうのをかるはこん

上野の国ふて樹の花ぬきけるをうて

ひくこうの方はをのをふけへふけたうきこの花のををうを弘

咲花の樹ふをけ法のふ系師(ニスリシ)ぬくこもらてなる法く

久見国慶寺正典主は歌のをふ雨中花を

いつ〜このと七日まちうて見るひの行をい花ふ春雨のふる

雨後〜をををきかうふ花のもふ新ふらぬをて春菅さも

雨後花

ををとのみけまをへぬらをを花ぬらはくるこうれ

[illegible]

山ゐなや猶うしめあの匂ひてうゐら花をもうしひさかる弟

山花

ちらかみのたつたの山めさらら花をのこまてしそひてなきさく

花ちらかるもうかたしたゐ立田山風をとうらは神なりしも弟

あしかはしきしきを桜の匂ひまさる花の山路をいらへふきぬ

うらとあけの空をくまる山のとふ房子みり花のいろう邦

暁山花

夕山花

花見て山路くらしう今そそ侍るやすへき月やまつへき

山春花

山さくらをしゆてさらうみちをふてちろとやふちん人のしろ

やまのさとそ春のさうみ弟みうみやたのをやまは花やむ

わをかう侍りる人もかき山里ふとしもたれの笠うかそわと

山里ふさくるや行て春の笠かうをとをとうしこのゆ名

春平のをちをさくうハたろ侍をやをとをうして山ふしもさく

松花

松山の花ゆゑ波の見ゆるかな　むまやきれるれるらむ

磯花

いそ山ふさみる磯の松ばかりはなかられてとかたいらはし　式

名所花

こよし世のよしの吉野花ゆゑ　花のふるさと

角田河ゆゑ

すみだ河つみの柳ゆゑ更て今をさかりとめきふけ　新

ゆゑ花

咲花のうつるをさそふかぜにうかふかりかもうらをうれつく

花浮舟

ちるを惜る移るはうらもむ池水の花はかみをふかもてかるる

花喜友

花見もとめる人えてる仏もて春はこやまのおろとも水し

春心依花

うつるかるちるを花ゆゑ風ふかるるとて散るるみられける

古河殿行の家をて山里ゆ花咲ゆゑとうつるを

中くふとれさをてあそ山宮の人めまれるふ　ちかるへ　ちるるを

つまとりて人とすみ侍りける所のさくらの花の
咲ころ侍りけるを見て侍りける歌
さくらをしつる宿ちなるみとしかれり紅花にきるもかくれなき色
三月の末つかた藤原摩三位入道敏の高輪の山荘に
まかりて巻物とりあつめさくらの花のさかりなるを物うらひ酒のみ侍りしに折ひ
いうしてある女房の袖にいうふれといひ侍
巻物ふさけるはの花なれは第代ふををちらしとりあつめ
月夜よさくらの花ちりはをうける絹ふ

ひさかたの月夜ふ巻のちるはれはけふ行て世のはてもよき哉
さくらの花うけるきぬふ
ふるさとのひふ彩とゝまりてんちらしの花のおもはのみらかしめかる
有馬左兵衛佐誉純之のとゝらう櫻の花の
ちるふ枝のおくるかとうけをしちきう紙らゝと
いひおこせられけるふかきをつゝもしくる
大かたの人ふ見ぬやまの花ふもつゝをやひらを
寄花祈祇
春ふ見ぬ山の花ふ祈しるけすをちるをらるぎ

花のもとに弓いる

弓はりを見たまへつゝ日にかさ塚の松さす斗花ぞ散ける

落花

きえなましにほひにほへる山桜あらしまたて花にとめも思ひし

ちるはちれちる待さくら咲よとも今たゝすもいつかあく時のなからむ

なやしくと風つこきぬさくらかれさしかくなると花のうつろひ

うつりゆくまてはまかせて散をまたあふにまかせぬ山さくらかな

風ふく待のとふにあれのちるを見し今ぞかきりと根しとをし

かへみるつれくれたる日にわりぬれは山風ふきてあれはちり行く

なかんもふきてちるそうつろふをたゝにまかせて花は根にかむ

またかれようそゝらむ花もわるあとをなしやはわかなく果つき

あたあれのうれにかひらふ所もて又はまちあとをかもふる

うつくしき春わかれるまちの日にわすれてもちる山さくらかれ

山落花

峰くもるみ空の花のうつかひを山にふく春の山風

ちるをふけちまちもとつきれ山おろしよ散しれなは花に吹しを

うつり花を見捨てたつ人のちるもしにわたる山そさひしき

山路落花

花ふく吹ちすゑのたうしさもむこうゝ侍きゝあをゝむまの山行

岡 落花

をうのくやらいのたうくゝふく落花の雪よりゝゝ一とのさびさ

落花流水

たうをもふとまきはの四ゝ郭の石さらゝゝ流ゝく山川のゑ

渓邊 落花

岩なみのおもゝくゝふくゝ紅川の花ちる世ゝ流ふくあゝ

三月三日ある人のもとにて

をとゝゝゝもしふの顔はゝ仕さゝゝ花もみちふゝふゝ

曲 ゝ宴

りゝのはなゝまてやゝゝ盃ふさ染の花とみちふゝふゝ

桃

麦はたのゝゝはもの花ゝ紅ぬゝもゝ春ゝ花ゝ桃もおゝと

夕はゝ日かゝむ花ゝとさひしきハ桃の花さゝゝゝるのやま畑

遲日

つゝゝゝゝ春ゝゝてゝゝ花ゝゝ春ゝの夕はゝゝゝゝ

春の日も柳のいとはいつもかゝく春花ゝゝうゝもゝゝ

春日

出の浦かぜむを井をわたる日の影うしろ　かすみふる岸

苗代

さる山日ゐ出くもあるこの山ぎわ田と十まち仏田と中をふしも

夕蛙

蛙ふくあるさしき山河のまらかるふ　ふ乃四くはう

夕されば小石なくこ谷川ふ　ぎとろくこと蛙かくらり

ひ河の中はもとなかく四あさこん蛙つまよふ　あこのあやさ

暮春蛙

これもせいなりうまそやくはまを蛙かくふふて蛙かくしむ

ふかきこのかくもふかこふれて四ちをこいこせの蛙かやかくりぬ

かくむことこ清くくもをカかきかこ風のこうこわひつや蛙

ちるらわて四くや川風のされあ　蛙こふこうあこのさやくさ

款冬

山ふきのまこのきこもくるふかこ　ふ花のんもいうこそ思ふ

口形しのこうあさみこも山ふこの下四く水い　おかそきこ　ゆは

藤

むくさこの花ふもふひのかこれ日と花ふかこうこけふもこくしつ

久貝周蹟宇正典主の家にて古寺夏を

夕つく日うつるもさびしき山ぎはの新緑の葉のきらめきに
はの陰ゆきふるくれるもかなたわらべ歌ちぢをふるうめく

紀の玄人行くゝのもとゝろ菫のかをうけるみ終をひ

久米也

一夜泊むしゐうゆ終るをうたゝ泊とさるゝといふのまつ名ゆ

牡丹のかをうけるみ波多完ろ寺の

日本のまふさくらのみうゆ入こやちてみてとそめのもみきみ

三宅 三七

そはゝ今多もうるふも多四るこの花蕾をとらひのを松

ちる花のゝかゝるもそゝもまのわゝのとゝやゝあゝぬ

花ちるぬゝちるまの日わゝをゆ多ゆ四きゝるまをひとす

まのもとを

花ちるゝゝやらひの寺ゆ山ゝれゝうすもんきゝゆ出ゆゝゝ

ちる花のわるもかゝれゝき神の多めゝるくゝもゝるゝ

三宅 三七 月

咲花のゝもものちゝぬ山の端ゆかゝるもやさびゝうあけの月

三宅 三七 蕾

ゆれはゝをもひて蕾咲をるゝまゝゝ日のゝ名の中ふゝも

[illegible] 春 屋

いろ〳〵の梢をわくるあさひ〳〵花ぞうしなのかとみ山ぶり

[illegible] 行

ちるふ花をうちはらひ人をうつす山ふきのせゐまやりうも

留春不駐

や〳〵もきぬやとまらぬまよ春の花ちるをうえてふられい雲ぶり

歳時春尚少

春ちたくうつるまて花ゐ[illegible]きそやと思ひ〳〵やもかそてうれみき

春天象

春しもちてふ三日月のうす[illegible]匂ひかすとをうふひうさうく

春色

かすみうち大内山のゐ[illegible]のゐもうさうれふ人のそてかゐ

春色深

かうち人の新川わうるうてうひく[illegible]吹なうは 水の[illegible]

春夕

ちきさうぬうちとうて中[illegible]ふ夕日さひ〳〵くうもし山もと

閑こうるう[illegible]て海色春夕

泉郎のうみやうふわさもうゐかきふあくまて春のうらかれてうし

春野

春日野はしちらもすそのなふつらしふつひみたれもこもゆ〳〵しく

春山霞ふ人をとうぬとうふ事を

花の色と思へるれとそふとうもちらをしまたいちひしかう陶

山家春

山さくらちらひゆめと桜もあらはるしをを春い出そふする

春田家

かすみさもる門田のそろはをあとしらきえぬとをはきけしそろふ

春川

春船やさゝ波調布さらくとせのまかすもあ川のこそ

ゆゝしちふる川波をもるハ船花や水の仏はうみをえゆらむ

春海

きつのをとうもあふひくれいつもいつをはあをぬるやる

春船

はうのやハを山もとのおもこうみをくるは春の川みを

春浦

さゝ〳〵笑ひくの立張はけうふ花咲うをは志うは海うを多

海上春望

かすとうつりてうつりて晴の夕なれば朝つる山和泉山こくうを

山　素　敦

行ちんのうらうすのゆうれ和かうけをみかもむ　いたもの素山

春　木

花の木ゆみ木みるうらひすあすれと和けの神ハ四ま宮けー

素　浦　松

さうふ木ぬとうぬのうられ和うすわとも仲はうゆとむく吹ん

青　松

初ちるのをつれ清めるー一つ松　うるみの衣をうれうきせ乞む

素　乞

ゆきさうむ花を待るの四うふ時素うれーき村かうはうれ

みる色ゆれをすゆんうれふ木ゆうう素花ちゆふ庵を乞むへく

素　人事

ゆすわきけなきを見ふて乞れ日を分とつもくとゆうあらーつ

素　旅

ゆゆい人のまれけのふさうち乞ゆり素面うすむ　ゆうゆのちはー

一むらけ高の中ふ水ゆうふうゆさう出ー　ゆるさゆうの素

山春　旅

¥ ハ ろ

郊をそしるあをとしてちぢ出るうぐひす橋今さかりなり

春神祇

いふしくの春ふかくそ男山峯井ふかくさむ花のしらゆふ

素古

さつき山花のおくそうちひきぬ物ふる紅入おのか紙